# 冥利に尽きる

佃 典彦

今回で二度目の選考委員となります、名古屋のミラーマン佃です。
前回は佳作三本で受賞作なしという結果でしたので今回は是非とも大賞を出したいと思いつつ最終候補作品を拝読致しました。最終候補なので当然ではありますが、どの作品にも優れたポイントがあり、絞っていくのが非常に悩ましいという選考委員冥利に尽きる結果になりました。

●『夕夕方暮れる』
発想はかなり斬新で面白い作品でした。同じ場所に集う、違う時間帯の人間達。一度読んだだけでは到底理解が出来ない難解な手法です。特に修・友里香・戸村の不倫三角関係はこの手法でしか表すことの出来ない表現方法でその場に居ない人物がすぐ横に座っている感覚は新鮮でドキドキしました。ただ僕にはこの手法で本当に作家が描きたかったのは何だったのか？ その疑問が最後まで残りました。執筆に至って手法が先に立つことはよくある事ですし、間違っているとは思いません。が、やはりもうひとつ先に〈作家が知りたかった真実〉を突き詰めていく必要があると思うのです。

●『愛しのクマちゃん～くじらの日々～』
演劇でドキュメンタリーを描くにはこの手法しかないだろうなと感じました。ここには描きたかった世界、書きたかった言葉しか入ってなくてとても素敵に思いましたし、正直涙しながら読んだのはこの作品だけでした。僕は２０２０年10月に『ブカブカジョーシブカジョーシ』を演出する機会を得まして、大竹野正典さんの他作品も読ませて頂きました。つまり大竹野さんを少しだけ齧った人間です。もっと距離が遠く、或いは全く関係したことのない人間が読んだらどんな感想を持つのだろうか？ そこに対して僕は答えを持つことが出来ません。その一点だけで推すことをためらったのです。この最小公約数の中にギッシリと想いが詰まった作品を書くことを可能にした仲間達を僕は本当に羨ましいと思っております。

●『空のトリカゴーBirdcage In The Skyー』
優しさの奥に熱い塊のようなモノが渦巻いている、そんな印象を持ちました。政治によって徐々に搾取されていく庶民、過去に闘争に身を置いていたモノが徐々に行き場を無くしていく様子、自分の正義に自分自身が徐々に追い詰められていく様子、全てが徐々に徐々にヘビが鳥を消化していくように内包されて行きます。上手いと思いました。主人公の悩める現実と死んだ伯父さんが帰って来たというファンタジーが入り混じった作品でした。『男はつらいよ』でもそうですが伯父さんという距離感がやはり良いですね。それも社会に適合していない伯父さん。ただ勿体無く思ったのは伯父さんの帰省が家族たちをもう少し物理的に引っ掻き回して欲しかった。引っ掻き回すと言うか、家族が勝手に引っ掻き回されるとでも言いますか…。そうすれば空港建設の話やピンク映画の話も伯父さん本人がしなくて済むのではないかと思います。伯父さん本人が話すよりも周りが話す方がテーマとセリフの距離が遠くなると思うのです。

●『これ　から　の町』
人間関係が織りなすドラマという点ではさすがだなと思わせる描写も幾つかありました。悟と義姉のやり取りが切なくて僕は好きでした。その分、この作品独特の手法である〈言語の変化〉がなぜ必要なのかが判りませんでした。作と演出プランが噛み合っていない感じがするのです。作品のための手法というより実験に近いと思いました。その実験が何のためなのかが今ひとつ掴めないまま終わってしまったように僕には思えました。

●『ステインド　グラス』
　先生達の個性もそれぞれ実感が持てますし、問題に対する先生達の向き合い方も各人の立場で描かれていて画一的ではなく、そこに作者の姿勢と覚悟を感じました。とても好感良く読むことが出来たのですが、勿体無いのは地震で休校になった学校という時間的にポッカリあいた穴みたいな中で描かれるべき人間模様がどうしてもそう感じられないのです。それは情報量の多さによるものなのかも知れません。ポッカリあいた穴がドンドン言葉と行動によって埋められてしまっている感じです。僕はいっそのこと、教師と子どもたちが〈劇を創る〉という事だけに絞っても良いのではないかと思いました。

●『わたしは家族』
　手書き台本は作者の想いがダイレクトに伝わるものだと改めて感じました。ひとつひとつのエピソードに手触りがあってそれは手書き台本によって増幅されているのだとさえ思いました。この作品はこの作者だけの言葉で綴られていてとても個性的です。人間の孤独感、結局は人間は一人なのだという事を肯定した上でなお繋がりを持ちたいという人間が抱える大きな矛盾を小さい世界で描いていてとても意欲的で素敵な作品です。ならば主人公の孤独の要因が離婚というのは少々軽すぎやしないか？ ラストに全部語らせるのは勿体無くはないか？ その二つが僕には疑問が残りまして、迷いましたが最終的には推せませんでした。

●『カンザキ』
　最後までこの作品は大賞を争いました。僕は過去に劇作家協会新人戯曲賞の審査で二本、この作者の作品を読んでいるのですが僕は正直言ってこの人の書く作品のファンであります。とにかく場所に対する嗅覚の鋭さと言いますか、生々しくその場所の空気感を伝える技術は相当なモノだと感じています。今回の運送会社も細かいディテールが残酷をキチンと下支えしています。セクシャルマイノリティーに関しては僕は詳しく論じられる人間ではありませんが、今回の作品では少々一面的な感じがしました。僕は遥の死に今ひとつ納得がいかなくて最終的に推すことが出来ませんでした。過去と現在を行き来する手法が持ち味のひとつなのですが、一年前だと距離感が足りないかなと思いました。恐らく妊娠期間とダブっているのだとは思いますが。この赤ちゃんの名前が〈ひかる〉というところに作者の想いが込められている気がします。

●『セミの空の空』
　今回、僕はこの作品を大賞に推しました。とにかくセリフひとつひとつが愛おしい匂いがするのとセンスが良い。不思議な世界と生々しい世界が混在していて、ずっと興味を惹かれっぱなしで読みました。最初は二つ目の月が一体何のメタファーなんだろう、なんとなく判る気がするけど上手く説明出来ないと思っていたのです。が、ふとスマホのことだと気付きました。勝手にですが、もちろん誤読深読みだろうと思います。でも最近、誤読深読みを許してくれる度量のある作品と出会うことが少ないのも事実です。死ぬ時に〈設定〉しないと宇宙の迷子になるという世界観も素晴らしく、これは人間が死なずにいられる〈死んだ人間を悲しまなくて済む〉ひとつの発明であると感じました。

●『あつい胸騒ぎ』
　普通のことを普通に書いて、悪人がいないのに話をこじらせて、こんなに何でもないように切ないドラマを描けるのはやはり相当に上手いのだと舌を巻きました。シーンが多いのは気にはなります。演出的な処理を特別な方法でクリアしているのでしょうが、それにしても…。課題が「初恋の思い出を使って創作」というのがちょっと勿体無くて、暗転前に千夏がシーンのまとめみたいに独りセリフ（課題執筆）を言うのですが、それが少々頂けないなと感じました。全然恋愛と関係ない課題だったら良かったのにと思いました。
　以上、少々長くなってしまいました。
　次回は新型コロナの影響もあるでしょうが、やはりＯＭＳ戯曲賞には期待せずにはいられません。